

環境教育センター第4回講演会（Mカフェ 4）報告書

「自然や農業を生かした教育の可能性 ―人と人をつなぐ環境教育―」

日時：2012年8月4日（土）

場所：南九州大学 都城キャンパス 学生交流会館

遠 藤 晃
神 田 嘉 延
石 川 米 男*

（北九州市立四倉小学校）

持続可能な社会の確立に向け、ヨハネスブルグサミットにおいて日本が世界に向けて提案した「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」も終盤を迎えている。世界的なESDの流れの中で、学校教育における環境教育への関心は高まり、その充実がことさら強く求められている。

日本における環境教育の法的背景として「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」平成16年10月1日に施行された。この法律は、平成23年6月に改正・公布され「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」として平成24年10月に完全施行され、この改正法の中で「学校教育における環境教育の充実」のための具体的内容が盛り込まれた。

また、2006年12月に公布・施行された教育基本法では、教育目標として「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと（第二条第四号）」が加えられ、学校教育法（第二十一条第二項）に「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」が新たに加えられた。このことは、学校教育における「環境教育」を推進するうえでの根拠ともなり、その充実が強く求められていることを示すものといえる。

一方で、平成20年には、日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育分科会が提言「学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて」の中で、すべての教員養成課程受講者に環境教育（自然体験を含む）を義務づけることを提言し、「環境教

育等による環境保全の取組の促進に関する法律」では附則として「教育職員を志望する者の育成」を含めた検討についても言及された。このように、学校教育における環境教育を担える教員養成は急務であるといえる。

環境教育というと、自然環境やその保全の学習ばかりに目がいきがちだが、人間を含めた環境、つまり地域や社会を持続可能なものに変えていく力の育成が環境教育の大きな目的となっている。国立教育政策研究所教育課程研究センターが2007年に刊行した「環境教育指導資料 [小学校編]」では、小学校教育における環境教育の基本的な考え方として、課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力などの「生きる力」を育成するために、環境教育が位置付けられている。

農を活用した環境教育に関して、日本学術会議農学委員会農業生産環境工学分科会は、平成23年9月16日に「農業を活用した環境教育の充実に向けて」という報告書を出した。この報告の中で、物理学、数学、化学、生物学の基礎自然科学の上に成り立っている学問という農学の特性を活かし、農業活動を通じて理数科教育を充実させることができるとしている。同時に報告書は、参加者に体験現場に潜む問題や法則性を発見させ、科学的に思考させる方法論が、指導者側に必ずしも十分備わっていないことが、農業活動を単に体験に留まらせる原因である可能性を指摘している。自然や農業を活かした環境教育を通して、物事を断片的な知識でなく、個々のつながりとして捉え、

考え行動する力を育む。それは、子どもの主体的な学びや確かな学力の育成、そのものと言える。学校教育において、授業における農業活動は単なる体験ではなく、明確な教育手法の一つとして取り組む必要がある。それゆえに、その意識や技術を持った教員が求められているのである。

南九州大学園芸学部は45年以上の歴史を持ち、園芸や造園で活躍する人材とともに、高校と中学に多くの教員を輩出してきた。また、これまで小学校教諭免許を在学中に取得することができなかったため少数ではあるのだが、小学校教諭として学校現場で活躍されている先生方がおられる。先生方は、いずれも大学で学んだ「農」を活かした教育を実践しており、明確な教育目標のもとに授業の中で農業活動取り組んでいる。そのなかの一人、石川米男先生（現：北九州市立皿倉小学校/教頭）は、「自分らしい学び方・考え方・表現の仕方ができる子どもの育成」のために、学校田での稲作を一つの手法として総合的な学習の時間に取組んできた。つまり農業体験を教育に活かす「方法論」を持った数少ない先生なのである。

今回の環境教育講演会M-cafe 4では、本学教授神田嘉延が、日本の教育政策の動向と現状を踏まえ、「農」を活用した環境教育の現代的意義について、その概要を解説をしたうえで、石川先生から、あいがも農法による稲作に主体的に取り組む、問題解決に取り組む子どもたちの生き生きとした様子と、それを仕向ける教師の方法論としての「作戦」についてお話いただいた。サブタイトルを「人と人をつなぐ環境教育」としたのは、石川先生の取組みから、自然や農業は単なる「場」に過ぎず、そこには、個々の子どもに向き合い、子どもの主体性を引き出す方法論をしっかりと持った教師や大人の存在が不可欠である事が明らかであるためである。

第一部：農業を活用した教育の現代的意義

南九州大学人間発達学部教授 神 田 嘉 延

神田です。じつは石川先生の教育実践が素晴らしいものだと思ひまして、その位置付けみたいなものを話してみたいということで引き受けたわけ

です。教育実践そのものの中身は石川先生の本当に豊かな実践があると思いますので、そちらに譲りたいと思います。

まず「農業を活用した環境学習の現代的意義」ということで、じつは私が南九州大学に赴任した理由も、ここは環境園芸学部があるということ、そしてこの環境園芸学部との関係で教員養成、また保育士を養成する、その他教育者としてさまざまな分野に学生を送り出していくんだということ、農業ということにこだわっているということ、を長谷川学長からさかんに言われて、こんな大学はたぶん日本にはないだろうという思いでこちらに赴任したわけです。

ただ始まったばかりですので、今後、農業を活用した、南九州大学の特長を生かした人材育成をどうしていくか、教育をどうするか、という課題があると思うんです。南九州大学は、じつはいま日本の教育界に本当に求められている大学だということを話をしていきたいと思います。

まず2002年にヨハネスブルグで環境サミットというのがあったわけですが、その時に当時の小泉首相は、日本として何ができるかということ、じつは日本は総合的学習の時間が始まっている時点で、まさに農業を利用した環境学習というものができんだということで高らかに、日本はESDという言葉で世界に宣言したわけです。宣言したのはいいんですけども、その後なかなか、このESDという「持続可能な発展のための教育」というものを日本の総合的学習の中で実践していく、これが十分にやられたかという、いま10年経って、決してまだそういうふうになりきっていない。日本も正式に言ったわけですから、その気運もあるし、そして国連総会でも日本政府はこのESDという宣言を世界全体でやろうじゃないかと提案した。それで国連ではみんな万々歳でこれが決議されて、そしてユネスコがそのセンターになるということで、日本の役割が極めて大きかったわけです。でも現実にはなかなか進まないということです。まあ、対外的には日本はよくやりますよということだけでも、国内的にはあまりそれは言えないというのが現状です。そういう点では国際的な約束が十分果たされていない。

そんなことで日本は、ESDということで教師の研修をもっとやらなくてはいけない。環境学習における教師の役割を果たすためには、研修をもっともっとすべきであるということです。小泉首相も当時、ESDを実践していくためには総合的学習があるということで、それを世界に宣伝していったわけですね。ところが105時間の総合的学習の時間が国内的にはいま70時間ですか、現実には減らされているわけですが、現場の先生は私から見るとあまり積極的でない。でもきょうの石川先生の実践を見ると、まさにそれを真正面から取り組んでいる。こういう石川先生のような先生をどんどんつくらなきゃいけない。それが日本の国際的な約束を果たすことではないかと私は思っています。

じつはこのESD、いま国連は2005年から十年計画でそれを実施しようと、そのセンターにユネスコがなろうということで、それは日本政府が呼びかけたものですから、日本も大々的にそれをやらないと恥ずかしいということもありまして、環境教育推進法というのを、もっときめ細かく学校教育に即してということで、平成23年6月に改正しました。法律が改正されたことによって、さらに教育委員会を通じて、たぶん各学校にはすべて通達がいっていると思うんですね。この通達に基づいてそれぞれの学校は、環境教育のカリキュラムをこんなふうに立ててますよ、教育課程はこういうふうにしていますよということを示さなければならぬのです。たぶん都城のすべての学校がしていると思います。でも実践としてどれだけ進んでいるかというのは、私の目から見るとこれからだと思っています。

とくにこの農業を活用した環境学習ということは、実質的なカリキュラムの編成だとか、先生方が自分自身で教材を作り出していかとか。いままでのような教育実践ではうまくいかない。教科書どおり教えるとか、学習指導要領に合ってるかどうか、そのことをそのまま教えるとか、上から言われたことをきちっとやれば仕事として務まるという、そういう発想では全然できないわけです。そういう点では各先生方、各学校で教材を開発するという、教材研究というのが、いま求めら

れています。また子どもの実態がどうなっているか、ということ进行深入研究していくべきかが求められていると思います。

私の専門は教育社会学です。教育学部の講義をしてきました。じつはこのESDだとか農業を活用した教育というのは、教育学の中では本流ではなくて少数派ではないかと学生には思われています。お父さんやお母さんにもそういうふうにする方がいると思いますが、じつはそうでは決してなくて、教育学の理論をずっとたどってみると、むしろ農業というのがいかに教育的に大事なのか。また環境学習というのがいかに教育的に大事なのかということを、さまざまな教育学者が言っているのです。

たとえばきょう皆さんに配ったプリントの中で、代表的な『人間の教育』というのを書いたフレール。これは幼児教育から始まって教育学部で勉強するときに必ず読まされる本です。この『人間の教育』を見ると、園芸というのがいかに教育的に大事なのか。園芸というのは農業ということで、動物と分けて使っているんですが。とにかく農業の教育、園芸の教育、これをさかんに言っています。まさに人間教育をやるとしたら園芸教育というのが根本にあるんだということを、彼は述べています。また農業というのは、人間が思うままにいかない。まさに自然と人間の関わりが一番よく分かるんだ。教育においても自分の意思どおりにすべてがいかないということを、子どもたちに悟らしていく。そして自然と人間の生活ということを、教育の中で分かってもらう。そういう点で、農業というのは大変大事である。また環境循環型社会をつくっていくという、これはまさに現代的な課題だろうと思いますが、そういう点でも、現代的にも非常に大事な課題ではないかと思っています。

フレールはさかんに人間教育としての園芸ということを言っているわけですが、農業というのは生産に結びつくわけですが、じつは人間の情操の面、情操教育としても非常に大事なことです。庭づくりについても草花の大事なことにしても、彼はふれています。さらに子どもたちが手伝いたがることも、農業として職業教育をやって

いく上でも非常に大事なことだと、彼はさかんに述べております。またデューイという人の『地域と学校』。これも教育学の中で必ず学ぶものなのですが、彼は具体的なカリキュラムの問題、どういうカリキュラムを作りますかということで大変参考になる教育学者だと思います。彼は総じて体験の学習より体験と科学の関係ということを便宜的に言っていますが、そのなかでも農業の役割を大変強調しているわけです。

農業というのが、単に汗水流す体験ということだけではなく、もちろん汗水流すことは非常に人間形成において大事なんですが、科学ということ認識する学力、全体的に言えば理科の学力をどうつけるか、算数の学力をどうつけるか、そういう科学の学習においても大変大事なんだと。そういうことで彼は、科学的学習と生活的学習を結び付けていく上での農業の役割ということを強調しています。

このデューイの考え方を現代的に生かす上で農業をどう利用していくかということで、じつは日本には総合的学習の時間が現在でもあるわけです。きょう石川先生とお話をしながら、総合的な学習は減らされたけれども、105時間から70時間、35時間も減らされたけれども、道徳の時間は35時間ですよ。あんなに強調されてる道徳でも35時間。特別活動は35時間×2ですよ。減らされたといってもなくなったわけじゃない。現場は何か、減らされたからなくなったんじゃないかという、そういう錯覚に陥る。でもじつは、総合的な学習は減らされたんだけど、大事なことはこのデューイからいろんなことを学ぶ上で、科学と生活、つまり総合的学習が理科とどう結びつくか、社会科とどう結びつくか、国語とどう結びつくか。そういう新たな段階に入ってるんじゃないか。そういう点で、総合的学習の時間は汗水流すという、単なる体験すればいいですよという時間では決してないんだ。新たに問題提起されている。そういう点で、このクロス・カリキュラムの考え方というのは現代的な意味でデューイから学ぶべきである。じつはきょう石川先生の実践はよりいっそう、そのことが見事に体现されているということでもあります。

たとえば鹿児島県出身の小原國芳の教育思想でも農業の教育力を積極的にあげています。この人は全人教育ということで日本の教育史の中では大変有名で、労作教育を展開した人であります。いまある玉川大学を創設した人です。いまだに玉川大学はその実践をしています、でもそれぞれ学部ができてくると融合がうまくできてないというんですね。ですから南九州大学もどんどん大きくなると同じような弊害が出ると思います。そこで代々学長さんになるときに、ここを創ったときの原点に立ち返っていただきたい。現在は研究棟が一つになっていますから、たぶんうまく融合していくと思うんですけども、大学が大きくなるとなかなかそうならないというふうに思います。玉川大学、じつは非常に苦勞しているというのが現実だと思います。

それから郷土教育ということで戦前さかんにやられた実践があるわけですが、この郷土教育の実践も、農業という科目を中心にやっておりました。郷土教育には二つの流れがあって、一つは軍国主義的な方向に進むというような、汗水流すということだけを考えた郷土教育。そしてもう一つは科学と結びついた、科学と教育という関係で展開した郷土教育というものがあるので、その点をみなさんが教育史を勉強するときにきちっと、これはどちらの考え方なのかということを、ぜひ見てほしいと思います。

それから東井義雄の『村を育てる学力』。綴り方教師として有名な人ですが、戦前の綴り方教師の人たちも『村を育てる学力』ということで、生活の論理の中から学力をつけていこう。その基本は農業である。そういう考え方をもって教育実践を展開した人です。じつはこういう考え方は戦後、コア・カリキュラムの実践によってさまざまな地域教材を開発した。

なかでもつねに難しい問題は、生活の論理の教育と科学教育が融合すればいいんですが、これがとかく分離してしまう。今日の多くの先生方もうまく結合できない。科学教育と生活がうまく融合できない。そして残念ながら理科とか国語だとか社会だとか、狭い教科主義になってしまう。そういうなかでなかなか、農業を利用した教育実践や

地域教材が普及することができないという問題があります。

それから現在ある小学校の学習指導要領ですね。学校教育はこの学習指導要領に縛られています。現場の先生はよく、学習指導要領があるから神田先生の言うことが難しいと言います。じつはこれも工夫であるわけです。学習指導要領の中にも総合的な学習の時間は消えておりません。きちっと位置付けられているわけですので、先ほど言ったクロス・カリキュラム、つまり総合的な学習と理科、社会科、それをうまくクロスしながら工夫していく。このことができると、この小学校の学習指導要領の中でも従来の伝統的な生活と教育の結合ができるんじゃないかと思っております。

じつはそれを市町村レベルでやっていこうという試みのある自治体があります。福島県の喜多方市です。ここでは農業という科目をつくっています。ここは農村地帯でもありますので、とにかくそれを中心に教育をやっていこうと。そういう地域も生まれているのであります。

それではこの近くの鹿児島とか宮崎ではどうなのかということで、きょう資料をあげたのは、鹿児島県が中心になっていますが、たとえば溝辺町の竹子（たかぜ）小学校。ここでは地域住民が明治の中期から、人づくりを、小学校を中心にして徹底してやってきました。山には木を、里では人づくりをということで、ずっとやってきた地域であります。ここは校長先生が代わる時も、あまり農業のことに関心を持たない校長先生が来たときは、地域住民がどんどん校長先生と話し合っていて、伝統をやってほしいということで、いまだに続いています。ここは年間通しての農業の鍛錬ということをきめ細かく実践して学力をつけています。ここはある程度変わった農業で、竹子小学校区全体の田んぼはみんなアイガモ農法でやっています。そういう地域ですので、ちょっと変わっている農業かもしれませんが、新しいことを積極的に取り入れているところです。

鹿児島県の南九州市川辺町の高田小学校、ここも同じように地域の村づくり実行委員会という非常に強力な組織があります。その人たちを中心

にして住民がどんどん学校に押しかけるという大変な話ですけど、そこに行って、そして先生の代わりを果たしています。先生はコーディネートの役割をしている地域です。総合的学習の時間を積極的に利用しています。そういうなかで学力を向上させています。なぜ川辺は学力が高いか。それは農業を利用しているから学力が定着しているんだということで、ここの教育委員会は胸を張っています。高田小学校の校長先生が川辺市（南九州市）の教育委員会のリーダーとしてどんどんやっています。

また鹿児島県の奄美の喜界。ここは小学校から高等学校まで一貫して地域の教材を利用しています。その教育委員会はまさに喜界学という地域学を中心にカリキュラムを立てています。じつは喜界高校というのが、喜界高校に進んだらいい大学にいけないということで中学校を卒業すると、喜界島以外の地域の高校に送り出していたんですね。それでは地域が廃れていく。何とかして喜界高等学校から九州大学と鹿児島大学とか国立大学に入りたいと。そういう高校の先生が何人もいます。とにかく喜界高校から国立大学にきちんと入れますよと。その実践を見事成し遂げたところでもあります。今では喜界高校に行っても安心して国立大学に行ける、というところが変わっています。それはまさに小学校から地域教材を積極的に取り入れる。ここは本当においしいサトウキビが取れる所ですけども、それを誇りをもって教育実践していくということでもあります。

以上でもう時間がオーバーしたので終わりたいと思いますが、結論は、農業というものがいかに教育的に大事なのか。この大事なことが、文科省、ユネスコが言ってるんだけど、日本の教育現場ではなかなか進んでない。それを南九州大学から始めるんだという意気込みでやっていこうではないか。そのセンターに環境教育センターがなってもらえればと期待しているわけです。以上で私の話を終わりたいと思います。

第二部：子どもと土から学んだこと 一個へ向かう意識—

北九州市立皿倉小学校教頭 石川 米 男

こんにちは。いま紹介していただきました石川米男といいます。石は石ですね。そして川、米、男。これは小学校2年までに新出漢字で習う漢字です。リラックスして聞いていただけたらと思います。自分は緊張していますから。大学生を前に話をするということはありません。一番年上の子で小学校6年ですから、12歳。非常に緊張しています。きょうはよろしく願います。

さて、きのう都城に来まして、川信先生から大学を案内していただきました。そのときにいろんな学生さんにお会いしましたが、みなさん「こんにちは」と言ってくれるんですね。すごく明るくて素直でいい学生さんたちだなと思いました。きょうは、母校でお話ができるということで、本当にありがとうございます。

私は教職29年目になりました。紹介にありましたように私は南九州大学の園芸学部造園学科を昭和55年に卒業しました。私が南九大で学んだことというのは三つあります。一つは、「自然の素晴らしさ」ですね。自分は高鍋の地でしたから、日向灘から上がる朝日を友だちと見に行ったり、尾鈴山とか、小丸川とか、とにかくすごく自然が豊かで素晴らしいとこやな。・・・の浜から見る朝日はとってもきれいかったですね。そういうのをもすごくもらいました。自然がすごいなあという。もう一つは、やっぱり「仲間の大切さ」というか。部活で柔道しながら部の先輩とか、研究室の一緒に研究していた同僚とか、あとは下宿の後輩ですね。結構いじりましたけれども。そういう仲間が大事なんだということも南九大で学びました。あと一つは、いま汗をかいてますけれども、これはやや緊張している汗ですが、「汗をかくことの大切さ」ですね。これはやっぱり体を鍛えることもそうですし、学ぶことも働くことも全部つながることですね。

この三つのことを学んで卒業していくわけですが、ぼくは一般企業に勤めていました。造園屋さんですね、北九州市の。2年間勤めました。当

初、教員になりたいという気持ちはなかったんですが、じつは私の親戚に就職もせずプラプラしているひとが一人いて、それがぼくより年上でした。たまたま私のお袋が、教員ではありませんが教育関係の役所に勤めていて、「大学を出てたら、通信で勉強をしたら教員の免許を取れるよ」と、そのいどこに言ったわけですね。いとは、いま言うニートですよ。私はもう就職してましたから、とにかく「がんばりい」という話です。

ところが叔母が母親に会ったら、すごく心配して、「ヨネしゃん、あんたも行き」とぼくに言うわけですよ。要するに「あんたも取れ」というわけですよ。「ぼくは働きよるけん」と言ったんですが、結局そのいところのお目付け役で、ぼくは教員免許を取りに行かされたわけですね。ぼく自身は教員をそんなにやりたいとは思ってはいませんでした。申し訳ないですが、それがそもそも免許を取るスタートです。

それで、いところのお目付けで一年間勉強しました。夏休みの期間にある集中講義にも、京都の方まで行きました。非常に楽しかったですね、それはそれで。その時は会社には、「じつはこういうことで」といってお休みをいただいて、9月から復帰しました。それから教員は実習がありますよね。みなさんはもう実習に行かれましたか。ぼくは、教員になろうと思ったのは実習です。実習のひと月で変わりましたね。

実習では6年の学級に入りまして、担任は理科の長沼という先生でした。6年だから緊張しますよね。査定授業というのがあって、それはこの学生が教員としてちゃんと授業ができるのか、という試しの授業ですね。実習に行かれたらそれがあると思います。それでよく勉強させてもらいました。ぼくは2回の査定授業を受けたんですけどね。

子どもたちの相手はやっぱり楽しいんですよ。その時に子どもたちと接して、やっぱり教員になりたいなあ、実習に行って思いましたね。ぼくは今ではたばこを吸わないんですけど、その時は吸ってました。長沼先生に、「吸っていいんだけど、理科室の横の準備室で吸ってください」と言われて、いつもその準備室で吸ってました。それで、実習が終わる日に子どもたちがワーッとやって来

て、「先生、たばこ吸うやろ」と言われたんです。におうものなんですね。「先生、吸っとるの分かる」と。

「たばこ吸いよる、うん、ごめん」と言ったら、子どもたちがね、「先生、先生になりたいんやろ」。そう言われました。その時はもう実習に行ったから、輝く子どもたちの顔を見ると、先生になってくたしょうがなくなったんですよ。自分の気持ちとして。それで、私はその時からたばこ吸ってません。それまでは一日3箱ぐらい、ほとんど機関車のように吸ってました。ところが子どもにもそう言われたら、その日からもうやめましたね。やめて30年ちょっとぐらいになりますけど。やっぱりその時の子どもたちの喜ぶ顔とかが、すごく頭にあって、「よし、一緒にいたいな」と思いましたね。それが教員を志した理由です。

一番きつかったのはピアノです。25歳の終わりがごろからピアノを習うわけですから。こんなでかい男が、こんな太い指で。それで習いに行ったのですが、同級生が5歳。なんと5歳の男の子ですよ。先生は私より4つ下の女性で、「また練習してないの。石川さん、だめですよ」とよく怒られました。30分間、苦痛なんですよ、レッスンが。それでも何とか。指はこういう感じですよ、一本指。それで2年近くその先生に習って、「発表会があるけど石川さんは出ませんか」と言われた。5歳の子と一緒にですよ。さすがにあつかましくて出られないですよ。「辞退したいと思います」とごまかしました。そのときは教員試験にピアノがあったんですよ。共通一次というのがありまして、文科省の定めた曲がありました。そこはもう気持ちですね。ぼくは本番になるとできたんですよ。両手で。右手を覚えて左手を覚えるわけですよ。ところが右手と左手と両方できなければいけないのに、一緒にできないんですよ、あれが。難しいなと思いますよ。でも訓練でどうにか、それだけは弾けるようになりました。それと「君が代」だけはできますけどね。そういうふうにしてスタートしたんです。

それで私は免許を取りましたが、その年は採用試験を受けきれないんです。なぜかという、受験勉強してない。全く。それで次の1年間で、い

とこと試験勉強をしましたね。偉そうにいえませんけどね。そうそう、そのいこですが、いま彼は校長をします、偉そうに。「ニートがぼくより先に校長になったのか」と言いたいけど、校長でがんばってますね。

それで初めて講師に行ったとき、7月の終わりでしたね。ナガタケ校長という先生でした。私が行ったら運動場でどこかのおじいさんが、スコップで側溝の土をあげていました。こんな作業をこんな暑い中、する人がいるんだなあと思った。その人に、「すみません。職員室どこですか」と言ったら、「これをまっすぐ行って、入っていったらあるから」。

「ありがとうございます」と言って職員室に入ったら校長室に通されまして、その時に入ってきたのが土上げをしていたその人でした。ナガタケ先生ですね。とっても失礼なことをしたんだなあと思って「先ほどは失礼しました」と言ったんですが。

その校長先生は真っ黒に日焼けしてるんですよ。それはそうですね、暑い中、土上げしてるんだから。そして得意技は何かというと、農作業です。朝から晩まで農作業してたといっても過言ではないぐらいでした、この先生。北九州市の中学校の校長会の会長までなさった方で、指導部の主幹もされた方でしたが、農業をするんですよ。

そしてぼくの仕事は翌日から一緒に作業することでした。土上げと農作業ですね。そして、やれレタスがとれた、キュウリがとれたというのは「持って帰りなさい」。みんなに配りまくるわけです。みなさんがいまやってるのと全く一緒だなあと思います。「おいしいやろう」と。おいしいと言わんと機嫌が悪くなるのを知ってますから、必ず「校長先生、おいしい。さすが」とか、みんな言っとるんですよ。それだけで満足して帰るんですよけれども。

その先生と出会って。その年にぼくは初めて試験を受けたら、たまたま運がよくて通ったんですよ。採用になって4月1日にあいさつに行くと、最初に会った教頭先生が、ずーっとプールの横を掃いてるんですよ。もう雑草でぼうぼうですよ。「教頭先生、ここぼくが使ってもいいですか」っ

て聞いたら、教頭先生が「何をするのか」って。「畑を」と言う。「ええーっ、畑なんかできるわけないだろう」「いや、貸してくださいよ」。そのとき5年の担任で、子どもたちは36名いました。まず二つの畑を作り、夏野菜を育てましたね。スイカ、ウリ、マクワウリかな。それとナス、それにキュウリ、ミニトマト。子どもたちと一緒に。毎日毎日。子どもはですね、やりだしたら一生懸命になりますよね。先生は指示するだけでいい。「これをやれ」「草を取らんと、みんな食えんぞ」とか。ぼくの言ってる指導はそれだけです。それだけでいいですよ。子どもたちは動くんです。自分たちで作戦立てて。まあ5年生ですから。

そしてスイカだとか、ここでも見ましたが、ワラをひいて、腐らないようにひくわけです。そして何玉か立派なスイカができて、「よし、ちょうど熟れどきやね」と。「じゃあ、明日、みんなで食うぞ」と。次の朝、学校に一番に行きました。子どもたちが泣いちゃうわけです。カラスにやられてしまったと。カラスちゅうのはすごいですねえ。何が悲しいかって、食べる予定だったものが食べられないことね、これほど悲しいものはない。子どもたち、泣いてましたよ。そしてキュウリだけが残ってる。キュウリはどんどんどんどん大きくなるんですね。すぐ太るわけです。「これならみんなで食えるねえ」と言うたら、必ずそんなときに「これ、ばあちゃんとこで床（とこ）漬けができるから」と言い出す子がいるんですね。「じゃあ、持って帰っていいよ」。そしたら、必ず漬けて持ってきてくれるわけです。床漬けてなんかて言うたら、「聞いたことある」ってみんな話してますね。そしたら場が盛り上がる。おばあちゃんにも感謝する。ありがたうって手紙を書く。全部がつながるんですね。つながっていく。人とのつながりってとっても大事だから、自分がたまたまそれをしたことでいろんな人とつながれるんだなあ。保護者ともつながれるんだなあと思って、それ以来学級担任では農作業をやってました。いまは学級担任ではないですけど。やっぱり自分の名前が米に田んぼの力、米男ですから、農業しないわけにいきませんので、関わるようになった次第です。

農業体験するよさというのは、総合的な学習の時間というのがありますね。総合の時間は70時間です。70時間といたら道德の2倍ですから、すごくあるんです。時間としては。だから先生が何をさせるか。それを作戦立てないといけません。自分はよく「作戦」と言いますが、べつに戦争ごっこが好きなわけじゃなくて、つついくなさになってしまってるんですが、作戦はやっぱり立てないといけない。そしてその時間を十分に子どもにとって価値あるものにしないといけない。ああいう農作業というのは、うちは北九州市の真ん中の八幡東区というところで、北九州市の都会です。なんにもしなかったら、まず土いじりすることはないでしょうね。土に触る経験ですね。

小学校1年に入りますと、生活科で最初にするのはアサガオを植えますね。アサガオに水やりするわけです。それが生活科の育てるスタートですね。そして1年生は何かかわいいかということ、傘を差して水やりしよるんですよ。ほんとにそれを見ると「1年生やねえ」とみんな職員室で言います。まあそれが触るというか、触れる程度ですね。

実際に土と本当に触れ合うというのはやっぱり田を耕すとか、植物、野菜を育てる。そういう経験をしないとけない。それで爪の中に土が入るわけです。黒くなるわけです。でも頭を洗うときれいになるもんですね。頭は便利がいいなあ。そういう経験。土の温かさ。やっぱりしないとけない。それが、先々とっても大切なことなんだということ。それを小学校でしなかったら、たぶん中学校でもしないですよ。

皆さんは田植えの経験ありますか。お、すごい。いいですねえ。その時どうでした。やっぱり土に触れさせる、そういう経験を残していかないとけない。温かみとか触れた感触とか。そういうのは体感だから、しないと分からない。それはきっと将来、物を考える時にも役に立つ。それは人として役に立つということなんだと僕は思います。それでこだわるようになりました。

では資料を見てください。これは私が担任をしてまして、ちょっと前になりますがその時の資料です。総合の時間ですね。全体で35時間ぐらいあ

ります。このときはまだ105時間のときでしたから、全体の3分の1の時間を使うということになります。35時間ということは週に1時間は必ずするということですね。その計画です。

まず事例だけを追っていきたいと思います。

事例1、出会いの部ですね。

どう出会わせるか。この学校は都会のど真ん中、小倉北区の一等地ですね。そこにある学校ですけれど、運動場は普通の学校の敷地の倍近くあります。非常に広い。北九州の中でもそういう学校はない。そしてプールの横に田んぼがありまして、プールの前にナカイ農園といって、しゃれてますよね、農園があるんですよ。各学年に、1年、2年、3年と決まってるわけですよ。「自然とともに育つ子どもたち」という、そんなふうに育てていこうというのがスタートです。そのために農業体験を徹底的にしました。学校の横にある、広い、80平米ある田。その田を使った取り組みです。

子どもたちは「5年生になったら田植えをするんだ」。意気込みがあるんですね。その中でもこの取り組みは、先生たちに非常に温度差があります。でも取り組むときは先生が一生懸命にしたら子どもは一生懸命になります。でも、決して先生たちは大変ではありません。なぜか。先生は指示しかしないんです。その時、その指示の仕方というのが作戦を立てないといけません。

まず初めに、「本単元は田起こしから脱穀に至るまで体験学習の連続である」とあります。そうなんです。米という字は八十八と書きますよね。八十八の手間がかかるわけですよ。米っていう字、素晴らしいです。ほくの名前の字ですけれども。それをやっている。そうやってすべてを。だから作戦を立てなければいけません。資料のずーっと下を見てください。代かき、田植え、草取りとありますね。この体験学習を行ったんです。そしてしめ縄作りもしたんです。自分たちの作った稲で。それぐらいできるわけですね。すべて。

次のページにいきます。

「農家の田中さんをゲストティーチャー（GT）にむかえて」、「田植え発見カード」と書いてますね。これは文章力。「文章分かりやすく書いておけよ」と言うだけでいいんですね。ところが子

もはそのことで書く力も養えるわけです。きれいに並んでますよね。

これを読んでいくと、まず縦に印がついたひもをつけます。これは印付けですね。ポイントポイントを、植える間隔をしっかりとあけないということですね。そういうことをGTの田中さんを迎えてお勉強するわけです。やっぱり人と人がつながる。それをつなぐのは子どもではありません。担任です。そこは担任がしなくてはいけない。学校によっては「田中さんと呼んでください」と言えば、教頭が呼ぶ場合もある。そして子どもとGTの田中さんをつなげる役が教師です。でもみなさん、いいですか。なんか田植えの体験で泥にまみれる、というのだけじゃない。子どもはしっかり国語の力をつけている。分析的に見て、客観的に見て文章を書く。そういった取り組みですね。これが大切です。

ずっといきます。かっこを見てください。

水田をのぞく子どもの数は一人二人と増えていった。少人数の発見が全体の問題解決の要因になった。というのは、増え続ける雑草。大きくなるヒエ。ガの幼虫の発生。タニシの大量発生。つぎは笑いますよね。低学年による水田での水遊び。これが一番の悩みの種なんです。自分たちもしてきたくせにね。いざ5年になると、「ここは5年生の田んぼです。入らないでください」。バーンと杭を立てたりするわけですよ。そういう作戦ですね。

これは全部教師がするものではありません。子どもにさせるんです。気付かせたらいいわけですね。そういう手段というのが必要になってきます。その作戦が必要なんです。

次のページです。

じゃあ、どういうふう育てていこうか。これが大問題なんですよ、みなさん。さあ、そこで子どもたちはそれぞれどうするかというと、総合農事センターに電話をしたり、農家の人に相談をしたりしています。そして自分たちなりの育て方についての討論会をするわけですね。させるんです。それを仕組まないといけません。先生たちは。「こんなにしたらネタが集まるよ」だけでいいですよ。ね。「この電話番号を聞いたけど、してみる？」

とか言ったら、するんです。子どもは。「みる？」
と言っても大人はしません。子どもはすごく純心
だから、「してみる？」と言ったらしめます。そし
て調べて自分たちなりの解決方法を見つけていく
わけですね。ここはあとから読まれてください。

次のページです。

「5年のお米にふりかかっている問題の解決を
考えよう」。学年会議をやったんですね。これ学
年全体でかかっていますから。それで「増え続ける
雑草をどうするか」「はびこるヒエはどうするか」、
もういっぱい出てくる。「病害虫はどうするか」。

先ほど聞きましたけど、皆さんは、田植えの体
験だけでここまで悩みましたか。先ほどの方。悩
んでないですよ。ヌルヌルとして、「あ、気
持ちがいい」とか、「気持ち悪い」とか言って、
汚れて帰る。でも小学生でも、やりだしたらこ
こまでするわけですね。こだわる。これはやっぱ
工夫がいるし一手間かかります。でもそれをしな
いと価値あるものにはならない。ぼくはそう思
います。

子どもたちはこうやって討論するわけです。農
薬を使いたい子どもたちの考えもあるわけです。
薬って草取るより楽ですね。体にいいと思ってる
子もいるわけです。「農薬を使おうや。使っても
いいやない」という子どもたちの意見があったら、
討論会用にこういう資料を作るわけです。作った
ものをみんな持ち寄って討論するわけです、学年
全部で。これは手間がかかりますよ。でもするのは
子どもです。そしてただ印刷して渡すのが先生
たちの仕事です。でもそこには「意図的な作戦」
がないとしていかない。

そして討論して、じゃあ5年米はどうやって作
ろうかというのが、そこに出てきます。だんだん
ですね。「アトピーの人もおるし、やっぱり農薬
は使ったらいけないんじゃない」。人に優しいで
すよね。優しいんです。子どもは、基本は。お友
だちのことも他者のこともしっかり思いやること
ができるわけです。それも体験を通して。そうい
うふうに決まります。

ずっといきます。途中、真ん中ぐらい。

80平米程度の広さと街中の水田という限られた
条件の前で、病害虫の面は心配ないことを知り、

全員一致で無農薬で行うことを決定した。決定す
るわけです。「よし、5年の米は無農薬でやろう」
という自己決定をさせるわけです。子どもたちに。
さあ、そこから子どもたちの5年がこだわる無農
薬農法を二つ検討するわけです。完全手作業とアイ
ガモ農法。それでアイガモ農法のグループと手
作業のグループの二つに分かれる。学年が。

次にいきましょうね。

北九州で唯一アイガモ農法をやっているのが、
平尾台というところの奥に住む篠田さんという方
です。またその人とつながるわけです。最初の電
話は担任がするわけです。「見せてください」。い
ろいろ相談してたら、そういう方は優しいですか
らね。「アイガモ、何匹か持っていきんしゃい」っ
て言うんですね。それで5匹もらいました。かわ
いいですよ。こんなに小さいの。アイガモ農法は、
稲がこう大きくなりますね。それとともにアイガ
モ自体も大きくなるんですよ。それがものすごく
いいんですね。そうやってだんだん稲が育つとと
もに大きくなる。アイガモは雑草を食べる。虫を
食べる。だから無農薬でできる。それと竹酢液で
すね。これを播くと無農薬で虫が来ない、とい
うことを知って対策を練るわけですね。それぞれの
グループで。これを子どもたちは新聞記事で知っ
たんですね。新聞も読んでますね。これはアイ
ガモを抱いてるところです。こっちは手作業風景
ですね。もうスズメがすごい。それを来させない
ためにキラキラ光るのを張る道具ですね。それぞ
れに工夫をするわけです。

そして夏休みが来るわけです。夏休みはどうす
るかということ、そこにありますように、自主的に
分担するわけです。ほっといていいわけです。自
主的に自分たちで分担表を決めるわけですね。そ
して何か作業をしたり。これ自分たちでするわ
けです。教師が「やれ」と強制するわけではあり
ません。強制しちゃうと「させられた」になるわ
けですね。だから達成感は少ない。「自分たちが
したい」「勝手にしろ」と。意図的にそう仕組ん
だのが教師ということですね。

さらに社会見学で「平尾台にも行きたい」と子
どもが言うわけですよ。日産の自動車工場を見た
ついでに、見て帰る計画を立てました。稲刈りを

する様子。今さらね、子どもたちは田植えの経験もあるし、また稲刈りの経験もあるでしょう。でもそれでも見に行きたい。それは今までの間の草取りとかが子どもを変えたんだということです。これは子どもがしたんです。私たちは何も手伝っていない。見てただけ。指示するだけ。子どもたちが自分たちで学ぶんです。刈り干しもしないといけません。いよいよ脱穀です。自分たちで脱穀するわけです。足を使ってこうやって。昔、使っていましたね。足で蹴って脱穀する機械もある。そして全部の量を量ると、粳で10.2 kg。まあまあ取れてますね。

そしていよいよアイガモとの別れです。アイガモはもちろん、胃の中に入るんです。食べるんです。おおっと思いますよね。実際は、それがアイガモ農法の利点なのですから、さばいて今度はその肉をいただく。ただし、それはしませんでした。校長先生に頼んで、2羽だけは学校で飼いました。あとの3羽については篠田さんに返しに行きました。

本当は食べるころまでするのが、食育。今はそういう時代になっていますね。育てたニワトリをさばくを見て、泣く子もいるし。そんな映像もありますよね、テレビでも。ところがそれがいざ、カシワ肉になると「おいしいねー」といって食べられるわけですよ。私もそうです。みんなそうなんです。子どもたちもそうなんです。で、命をいただきます。それもこの農業活動とか体験活動についてくる、命を大切に作る取り組みだとぼくは思います。お米の一粒一粒も生きているわけですから、やっぱりぼくらは命をいただいているんだから、ということの指導もできるし。

それからしめ縄をつくります。子どもたちが作ったようなワラではできませんね。米を作っている人をお願いして来てもらう。自分たちのワラもよく叩いて。水をかけて叩きますよね。そしてこう縄をなう。これができるとうれしいわけですね、子どもたちは。それをすると正月のしめ縄に間に合う。

あとは次の年の5年生もまたその田を使いますから手入れをする。

そういう体験をずっとしたあとに、次のページ

開けてください。子どもたちには振り返りをさせなければいけません。自分の活動はどうだったか。その中で保護者にもアンケートを書いてもらいました。コメ作りのご感想を、保護者から書いていただいた一つです。

「コメ作りをすると聞いて、最初、私たちは、小学生の頃、田植えと稲刈りを体験するぐらいの簡単なものだろうと思っていました」。まさにそうですね。大人になったらそんなもんですよ、みなさん。体験というけど体験ではありません。

「土づくりから水入れ、田植え、害虫対策など、子どもたちが中心になり、あんなにも本格的に関わっていくものだとは……。分からないことをパソコンで調べたり農協に電話したり。とくに害虫対策では竹酢作りですね。竹酢を自宅の植物にも使っていたので、親子でいろいろと話し合ったのを覚えています」。やっぱりこだわっていくと、子どもの背後にいる保護者もこだわってくれるわけです。食事の合間にたぶん話をするんでしょう。学校から帰ってきたときに一番に伝えるんでしょう。

あとは子どもたち自身が振り返って自分の成長をね、「こんなことしたよね」「ああだね」。これはほぼ、向こうに掲示していただけてますね、ああいうふうに模造紙にまとめて掲示するわけです。そして最終的には、保護者のアンケートを紹介したり、自分たちの成長したことを文章に書いたりするわけです。

さあ、それでなぜ5年生かというのは、理由は一つあります。一つは5年生では社会科の授業で農業、漁業、第一次産業に関わる人たちの勉強をしますから、それともリンクするなということはいえると思います。そして子どもたちがここに書いている文章ですが、これは実際に関わってるから、自分たちが1回体験するからこういう文章になっているとぼくは思います。文章を書く力というのは、国語の中で読むことを重んずるというのがありますよね。指導要領を見たら分かりますけれども。これはこの体験をしたから書くんです。ただ田植えに行っただけ、稲刈りに行っただけ、ではなかなか書けない。苦労話の連続ですよ、子どもたちには。やっぱりそれが体験なんだなあ

と思います。

あとワラビーキャンプの指導員の資料を書いています。ほくは市の施策の不登校キャンプに、この一週間、7月24日から29日まで、5泊6日してきました。その時のキャンプネームは「イッシー」です。こうやって首からネームをぶら下げてたんです。みなさんもイッシーと呼んでかまいません。そういうことで指導してきました。

そこには指導員の心得、指導員の10カ条ですね。偉そうなことを書いてますけれども、こういうことを、これから担任になるみなさんは、やっぱり持ってもらいたいなと思います。これは何も不登校の子どもだけの問題ではありません。やっぱりそれぞれ個々の子どもは悩みを抱えていますから、しっかりそういうこともわきまえられるような教師になってもらいたいなあとというふうに思います。この話をしたら、また一時間ぐらいかかりますので、ここではしません。

何か質問があったら、何でもいいのでしてください。

あなたたちは教職になろうと思ってここに来ました。相談する先輩もいないと思います。先生たちは相談に乗ってくれると思います。どんどんしてください。私でもいいです。皿倉小学校にファックスでも何でもしてくれれば、答えられることには全部答えていきたいと思いますので、よろしくお願いします。やっぱり南九大から小学校の先生が出てくるのは心待ちにしているし、保育士さんもそうです。がんばってほしいなと思います。

なんか取りとめのない話で申し訳ないんですが、共に育たなければ教育ではありません。教育は教えることと書きますけれど、そうではないんです。「共に育つ」というふうに書いてほしいなと思います。間違っても脅威の脅ではないですね。それは響かないと思います。子どもたちの心に響く、そして自分たちで育っていく。次の年、同じことするんだったら何も教材研究しなくてもいいやろ。とんでもない。違います。教材研究って甘くはありません。農業も同じです。毎年違うんです。季節は変わるんです。それを見る目があるわけです。農家の人たちには。そこから学ぶことは優しさであり、すごく知恵があることであり、そ

ういうことを求めて学んでほしいなと思います。本当に「共育」になるようにがんばってください。

最後に、「たんぼの幾日踏まれて今日の花」という俳句があります。これはですね、新美南吉さんという人を知ってますか。「ごんぎつね」の。あの新美南吉さんが小学校の卒業式のときに学校の代表で読んだ答辞の中の句だそうです。さすがすごいですね。12歳の子が、卒業の日の答辞の中で詠んだ句です。これはやっぱり新美南吉さんが非凡な才能をもっている素晴らしい作家です。尊敬してます。ほくも大好きです。南吉さんの絵本は。

でもそれを鍛えたのはだれだと思いますか。先生です。学校です。そこをね、やっぱりみんなこれから教員になっていくんだったら思っほしいと思います。ほくもそれは常に考えています。やっぱり鍛える気持ちでいた大人たちがいたということなんです。そのことを新美南吉さんは卒業式に詠んだんです。それを考えるとやっぱりほくらはがんばらなきゃいけないなと思います。だいぶ爺さんになりましたけれども、またがんばっていききたいなあと。子どもが喜ぶ顔が、一番疲れが取れます。

きょうは本当にありがとうございました。みなさんのいい顔を見ました。元気のいい顔です。不安でしょう。「どうなるっちゃろか」で。でもまず免許を取って、スタートは一緒です。「よいードン」まで待ちます。「よいードン」までには用意しなくてはいかんこともあります。ここの南九大のすごさっていうのは、ずーっと出てきたでしょう、「土いじれ」と。そこから学べよということじゃないかなと、ほくは思います。以上です。

質疑応答

質問1：教育には「作戦」が必要だということですが、その作戦を立てる上で一番考えるべき大事なことはなんでしょうか。

石川：それはやっぱり「ネタ」ですね。教師が持つ引き出しとしての「ネタ」がいります。何かに取り組んでいる子どもたちが困ることは、こちら

は前もって分かる。こんな時にはこんなふうな困ることがでるよね、という予想ができますから、それに対して「ネタ」があります。たとえば、先ほど言ったような、「農協のこういうところに相談できますよ」という窓口を教師は知ってます。その電話番号を調べます。その方に子どもに連絡をさせる。そういうネタを持つとかなきゃいけない。ネタの準備をある程度しておかないと、すぐに出ない。子どもはタイムリーじゃないと気に入りませんから。大人は「ちょっと待ってね」と言うけど、そうじゃありません。「来たな」というと、「これがあるよ」。「この人に聞いたらよく分かると聞いたよ」とか。そしてその人には、「いつぐらいに連絡するのでお願いしますね」と、相手の人に対しても前もって連絡をしておかないと。子どもは突然するかもしれません。

この子たちは、「どこのお米がおいしいから、種もみは福島県のどこどこに連絡していいですか」って言うんですね。それで、それを子どもがしちゃうと送ってきてくれるんですよ。その方にはすぐお礼状書きましたけど。そんなものですよ。大豆を育てた学年は、納豆を作りたいと言って水戸納豆のどこかに、自分たちで調べてお願いしていた。そしたら納豆菌を送ってきてくれて。そんなこともありました。そこはネタを持つとかなんといけな。こんなことしていいんだなと、子どもたちが食いつくようなエサをまいとかなんといけな。ただ「調べろ」ではなくて。

インターネットにも載ってます。でも分かりません、インターネットでは。子どもが見ても、読んでも。よくありますよね。総合が最初に入ったときにすごく多かったのが、3年生の国語の勉強に「三年とうげ」というのがありますが、あれを勉強したあとに韓国の勉強をするわけですよ。すると韓国のいろんな食材とかインターネットで調べるわけですよ。そしたらキムチのつけ方はどうかっていって調べて、子どもたちはそれをプリントアウトするだけで、それを壁に張るわけですよ。さも自分たちが学習したように。でもそういうことでは子どもは本当には理解できていない。それでよくはいつも「先生、この漢字、読みきらんけん、待ってって」って言うんです。難しいですよ、

地名の漢字とか。中国の何々地方の餃子の作り方とか出てきても、何の役にも立たない。

これは前任校でのことですが。総合が入ってきたときに、九工大が隣にありまして中国の留学生さんが子どもを連れてくるわけです。そのお母さんたちがたくさんいるから、中国の説明をするわけですよ。韓国なら韓国の説明を。それで子どもたちはいろいろネットで調べる。でも、出してきたものを見ても理解できない。よくでも分からない。そこは違うと思わないといけません。

その時に一番うけたのは、ある子どもが韓国の話の絵本を持ってきて、その絵本を自分なりに笑いながら読みよるんですよ。いちばん悪そうな子が。手書きで下手な絵なんだけど、その絵を模造紙に拡大して壁に張ってるわけですよ。そしてその絵本を読んだんですよ。そこが一番うける。子どもレベルで。みんなそこに集まってくる。ほかの所はインターネットでワットと調べてきれいにしてるけど、だれも読まない。難しい。

説明している子どもも分からないようなことを説明させるような総合はダメだ、ということです。子どもがしっかり理解して感動したことを伝えれば、どんな稚拙な文章であろうが、分かりにくくろうが、それは分かります。ほかの子どもたちに分かる。そこに行って笑うんです。見てた担任は、「お前たち、そこばかり行かんであっちにも行ってやれ」。そんなもんです。

質問2：クラスに約30人いれば、いろんな生徒さんがおられると思いますが、こういう作業をするときにどういう形で、どのような観点でうまくまとめていけるのでしょうか。

石川：それは発達障害とか、いまはいろんな新しい配慮が必要なお子さんがいるのが現実です。アスペルガーのお子さんとか自閉のお子さんについては、基本、作業が好きです。だからそういうのはあまり苦にはなりません。ただ自分がいままで持った子どもの中には難病の骨形成不全で、車椅子の子がいました。これは興味深いことですが、それなりにほかの子が助けてくれます。そこをうまく引き出すこと。担任一人では無理ですね。手伝ってくれますよ、子どもたちは。その子はいつ

も親が連れてきてましてね、遠くの方でしたから。ぼくは意地が悪いから、その親に言いました。「そんなん甘やかすな」と。それが反発くらいました。「えーっ」と。それには理由があって、この子は一人でこれから生きていくんだから、甘やかしたらいけないと。

ぼくは3年生の担任になったのがその時が初めてでして、初めて3年を持って、「この学校、いい学校や」と思ったんですね。そこにそういう子がいたんですよ。最初にけんかしました。でも当然、その子も学校に行けば、そういういろんな活動をしたり田んぼつくりができますよね。田植えも行きました。

その子を連れていって、車椅子から田に入るために「海パン履いてこい。汚れてもよからうが」って言った。「先生、賢いね」って言われましたよ。でも何ということはない。ただ汚れてもいいようにという作戦なんですけどね。「海パン、履いてってよらしい」。そしたらほかの子も「ぼくたちもいいですか」「分かった。いいよ」。要するに泥遊びしたいだけです、子どもは。で、車椅子の子も一緒にしましたね。だけどそこにはケガが付いてくるから、ぼくは絶対に目を離しません。つねに傍らにいました。そういう配慮はすべきですから。

それから、ぼくがお母さんに、子どもが一人で来るように言って、その子は車椅子で登校してきました。ほかの子たちには、「坂の所に来たら先生を呼べ」と。「先生は玄関に早く来てるから、あの子が車椅子でここまで来たら、だれでもいいから先生を呼びに来い」と。呼ばれたら行って、車椅子を抱え上げる。そこまで子どもたちはちゃんと関わってくれました。その子がもう30何歳ですかね。そこが、その子がこれから先がんばっていかなきゃならない礎になったんですね。親御さんも理解してくれましたね。仲良しになりましたし。それでいいんじゃないかなと思いますね。おっしゃるように、個別に対応しないといけないお子さんがいるというのは事実です。ただ作業は、さっきも言ったように結構好きです。

質問3：先生方に温度差があるとありましたが、

「先生に作戦を立てていただけるような作戦」というのが何かあるでしょうか。

石川：紹介した小学校はもともと北九州のなかでも理科で有名な学校でした。ソニー教育財団の発表をしたり金賞をもらったりしたような学校でしたから、この学校自体にそういう特色があって、カリキュラムがある程度決まっています。子どもたちが取り組むことが決まってるんですよ。5年生では稲を育てる。2年生ではね、麦を育てるんです。その経験がすでにある。

そういうふうに、この学校の売りとしてはこういうのがありますよ、というのがまずベースにある。だから子どもの意識の中には「5年になったら田植えや」というのがあるんですね。先生たちも、虫とか嫌いな人がいますね。でもこの学校にいたら好きになって出ていきます。カリキュラムの中で年間9時間は「自然発見タイム」というのがあって、その中で1年生は雑草園でいろんな虫を見つげるとか、そういうことを常時やってるんです。年間10時間とか。それとあとは伝統づくり。このような学校でも先生たちに温度差はあります。でも、保護者が許さないんですよ。なぜかという、「5年になったら田植えがあるって、あれだけ言ったのに」。子どものほうもお兄ちゃん、お姉ちゃんたちからそう聞いてるわけですよ。そうするとせざるを得ないわけです。教師を追い込むんですよ。6年になったら、2年になったらというのが決まっているから。それが一つの手かなと思います。

質問4：やる気のない子どももいると思うのですが、どういうふうにすれば、そんな子たちにも一生懸命させられるようになるか教えてください。

石川：難しいですよ、それは。その子その子の得意分野があるから、基本はやはり難しいと思います。でも強制はしたくないですよ。だけど子どもはシビアです。たとえば班で行動するでしょう。グループに分かれますね。そしたら人数が決まるわけですよ。たとえばアイガモは朝一回出して、夕方は小屋に入れないといけない。夏休みはその作業を子どもがやるから、当番を決めるわけですよ。それだと自分もしないといけない。苦手

な子もいますよ。ところが子どもというのは、学級で話し合ってグループで話し合いますので、イヤイヤでもします。子どもに任せたらする。親も協力します。先生がしちゃうと強制になる。苦手な子もいていいんじゃないかと思います。

たとえば体育で、跳び箱が「どうしても苦手なんよね」といったときに、「苦手でもしないとイケないから、しなさい」じゃなくて、苦手でもできる跳び箱の仕方を考えないといけないし、苦手な子どももどうにか関わられるような、それこそ作戦を立てないといけないと思いますね。そうしたらその子もたぶん分かってくれると思いますよ。

状況はいろいろあって、まったく無理という子もいますよ。イネ科の植物がダメとか、アトピーとか、いま多いですからね。だから配慮しないとイケません。除去食とか大変です。親の許可を取ってしっかり見ていかないといけない、そういうお子さんもいます。いままでに鉄アレルギーというお子さんもいました。驚きますよね、鉄棒ができないんです。でも、しっかりその子の様子を見ていって、見取りはできるわけですからね、どういうふうな意識になってるかというのは見ていたら分かる。その手間はかけないといけない。

あとは先生が楽しく理解できてたら子どもはついてきます。リアルですよ。悪そうな子ほど変わっていく。ほんと悪そうだなというやつがおって、おもしろい話があるんですよ。運動会で、ここは入ったらいけないという縄が張ってあるでしょう。それを、ものすごいでたらめなやつですよ、その子どもに「ちょっと来て手伝え。運動会のために生きとるようなもんやろ」と言ってさせた。そしたら「先生、おれ、したもんね」と言ってくるんですよ。好きなんですね。動くことが好き。その代わりに一緒に、活動を共有しないと。そして笑っていったらどうにかなると思います。その努力はしないとイケないと思います。

質問5：農業のことなどで、いま学生が免許を取る前に、畑の中でどういうことを一番学んでおいたらいいでしょうか。

石川：やっぱり手間がかかるわけですよ。手間というのがすごく大事で、育てるといのは結果論

から言うと、手間隙かけないと、時間をかけないと育たないんですね、人間として。そこには仲間もいるわけですよ。 “間” という字、手間もそうだし、時間もそうだし、仲間もそんなんですね。それで人間になるんですね。要するにまず、こだわってほしいなと思いますね。時間とか手間をしっかりとってほしいと思います。

草抜き一つにしても大変ですよ。子どもたちに草抜きしてごらんとすると、おそらくこうやって腰だけ折り曲げて抜くんですよ。腰を下げない。ほくはよく言うんですよ。「おまえ、ここを全部抜け」って。「えーっ」「たったこれだけやないか。全体を見ろ」「ほんとやね」と。それでこうやってしゃがんでみせる。ほくはそうします。そしたら子どもはこの姿勢で抜く。そうしなければ立ったままですよ。学生さんはどうですか。しゃがめますか。低い姿勢だとよく見えるから小さい草も見落とさない。立ったままだと長い草だけ抜く。それは抜けてないです。切れてる。雑草は知恵があるんですよ。それとの闘いですよ。だから手間がかかりますよ。ただ教えても子どもはしません。そういう手間をかけてほしいと思います。

質問6：タイトルに「個に向かう意識」とありますが、農作業とかキャンプがどういうふうに個とつながるのかお話しいただければと思います。

石川：キャンプは20年ぐらい関わってますね。毎回13、4人ぐらいですね。不登校の、学校に行けない子どもたち。平成元年からこのキャンプは始まりましたが、最初の頃、不登校の子どもたちはキャンプ場にほかの子どもが来ると隠れていましたね。私たち指導員もカウンセリングの研修で初級と、さらに中級というのがあって、ほくはそれを受けて指導員になったんですが、最初はすごく気を使ってました。それが一つ。それと今はものすごくユニークですね。不登校も変わったなと思います。最初は登校拒否児童と言っていましたね。学校に行くのを拒否する子。不登校と名前が変わってから15年ぐらいになります。今は個々の子どもたちをしっかり見ておかなければ指導できないですね。

学校の先生はすぐ言いたがるんですよ、その子

どもたちを見たら。キャンプに行って5泊6日ですよ。子どもたちはいろんなことを言いますよね。指導員は最後に子どもたちに「がんばって学校に行けよ」って言いたがるんです、職業柄。でもそれは言っちゃいけないんですよ。キャンプに来るということは、その子がどうかしたいと思って来るわけですから、それを分かってやらないといけないし、うかつにそういうことは言えないですよ。そのことが指導員にはあって、個々にというのは、何も見えないような形かもしれないけれども、子どもたちの実態をしっかりと見ていかないと、やっぱり指導というのはできないなあという考え方です。

学級担任でも然りですよ。よく連絡帳を書いています。あの連絡帳にいいことを書いてほしいと思いますよね。文章は残りますから。困ることは書かないようにしてほしいなと思いますね。若い人にいつも言いたいのは、「それは連絡帳に書くな」。書いたら残るんですよ。そうじゃなくて、いいこと書いてねと。

いいことってどんなことかといったら、小さいことなんですよ。たとえば僕は、「きょう給食の時に、隣の子がこぼしたのを自分のティッシュペーパーで拾ってくれました。感謝しました」とか書いてたんですよ。でももしこぼしたほうの子に、「こんなに暴れてるから給食をこぼしたんですよ」と書いたら、その子は家に帰ってまた怒られなきゃいけない。だから注意とかそんなことは、ぼくが思うのは電話で言えばいい。「きょうはこんなことがあったけど、こんな指導をしときました」でいいんですよ。文章に残さない。連絡帳にはいいことしか書かない。

その代わり個別でというのは、均等割りしてやらなくちゃいけません。30何人、印をつけておく。閻魔帳じゃないけど記録をつける。何月何日だれだれ。書いておかないと忘れるんですよ。これだけ一生懸命に子どものことを見てても忘れます。とくにほめるということは、そういうことです。10人いたら10人がほめられるのが理想の姿です。そういうような見方をしないといけない。それも生活の中のちっぽけなことでもいいから。

難しいと思うかもしれないけど、個々の子ども

をしっかりと見ていけば、でもその子のよさが表れるようなことはすぐ分かる。掃除のこと、お手伝いをしてくれた、元気よくあいさつをしてくれた、そんなことをちょこちょこっと書いたんですよ。30人のうち毎日3人ずつ書いたら10日でワンクールですよ。そしてもう一遍見直す。「あ、忘れとった」。で、そいつのいいことをすぐ書く。ネタを。そいつ家に帰ったらそれを親に見せですよ。そしたら会話が生まれます。それを想像して笑うわけです。変な趣味ですけどね。だけどそれでいいとぼくは思いますね。それぐらいですね。個々を見る。

実態をしっかりと知ることと、みんな均等にやらなきゃいけないんじゃないかなと。自分が子どもの立場になったらそう思いますね。自分がされてうれしいことは子どももうれしいわけですよ。だからきっとそうしたほうがいいと思います。

司会者：ありがとうございます。最後にあった、自分がしてもらってうれしいことをしてあげる。自分がいやだと思った教育、たぶん、みなさんこれまでいろんな教育を受けてきて、これはいやだと思った教育もあったんじゃないかと思います。それをやらないということが大事なんだと思います。

きょうのテーマは「人と人をつなぐ環境教育」ということでした。最後のお話にもありましたように、いかに個を見るか、相手を見るかということが環境教育の中でも大事である。それは単に環境教育ということではなくて教育がそういうものだ。相手がいて相手をしっかりと見て、相手の状況がこうだからこうしなきゃいけないということ、すべて分かった上でやらないと教育はできない。非常に責任の重い、それだけの技術、能力、経験を積まないとできないことがよく分かった。そういう講演会であったと思います。

環境教育というどうしても、自然であるとか環境とか表面的なことにとらわれがちなんですけれども、環境教育を通して何を子どもたちに育むかという視点、そこがとっても大事で、そこをクリアしていくことがこれから大事になってくるん

じゃないかと思います。

最初に神田先生のお話にもあったように、世界に発信したはいいけれども、なかなか日本では、現場ではうまくいっていないということがある。それはやはり表面的な体験であるとか、環境教育で何をを目指すかという観点が非常に弱いんじゃないかというふうに感じました。逆に言うと、そういう視点をもって環境教育に取り組んでいる人をここから、南九州大学、宮崎の都城から、新しい環境教育というものを世界に発信していけるんじゃないかという可能性も感じました。